

【関生支部第57回定期大会】 湯川裕司・新委員長を選出 次の10年を見すえた世代交代を実現

10月10日、関西地区生コン支部は第57回定期大会を大阪市内で開催。新たな執行委員長に湯川裕司さん（前副委員長。右下写真）を選出した。半世紀にわたり組織を率いてきた武建一さんは今大会で勇退した。

世代交代は数年前からの課題。昨年の定期大会以降、執行委員会、中央委員会など機関会議で議論を重ね、今回の役員選挙で実現したもの。

湯川新委員長は、新執行部を代表して、「この弾圧をなにがなんでも乗り越え、勝利していかなければならない。なにがあっても前を向いて進んでいく」と決意を披瀝した。

湯川新委員長は48歳。「関西生コン事件」では8回逮捕され、644日も長期勾留されたのち、昨年6月4日に保釈された。

なお、世代交代にともなって、新執行部の書記長には細野直也さん（40歳）が選出された。

<新三役>

執行委員長	湯川裕司	（新任）
副執行委員長	坂田冬樹	（再任）
同	七牟礼時夫	（再任）
同	武 洋一	（新任）
書記長	細野直也	（新任）

大会宣言

今、私たちが生きるこの社会は深刻な閉塞感に覆われている。

安倍・菅と続いた政権が行ったのは、「嘘とごまかし」「政治の私物化」であり、「仲間内への利益誘導」であった。

コロナ禍で収入が大幅に減った事業者に対して給付される「持続化給付金事業」においても、電通が事業を請け負うための団体をつくり、そこが事業を受注し、中抜きしたうえで電通に再委託。その後、何次にもわたって再委託が繰り返されていた。電通幹部はこれを「利益率の良いビジネスモデルだ」と自慢げに語る始末だ。

コロナに感染しても入院することすらできず、「自宅療養」という名の「棄民政策」で多くのひとびとが苦しみながら死んでいる一方、権力を握った政治家たちや一部の大企業はここぞとばかりに公金にむらがり、制度を自分たちの都合のいいように変更し、この社会を食物にして肥え太っている。

「一部の者だけが富を独占し、多数の者が貧困にあえぐ」この構図は、コロナ禍でより露骨な



形で私たちの目の前にあらわれている。新たに発足した岸田政権も、「適正な分配」を謳っているものの、自民党の実権を握るのは「3A」＝安倍・麻生・甘利であり、その本質はこれまでの新自由主義路線と何ら変わらない。

同じことが私たちの働く関西の生コン業界でも起きている。

昨年12月、近畿生コン関連協議会が西日本建設関連オーナー会との間で「モデル賃金」に合意した。これは大幅な賃下げであり、これまで関生支部が労働者の生活向上のために闘いとしてきた成果を潰す暴挙だ。ここに今回の弾圧の狙いが端的に示されている。

大阪・兵庫エリアの生コン価格はかつてないほどの高値で安定している。それにも関わらず、その利益は生コン製造業者が独り占めし、そこで働く者や生コン輸送業者、セメント輸送業者にはほとんど還元されていない。さらに、生コン製造業者のなかでも、大阪広域協組一部執行部の経営する生コン工場のシェアが突出して高いなど大きな格差・不平等がある。「力の強い者がカネも権力も握る」社会の縮図とも言える状況が協同組合内部に存在している。

この間、大阪地裁・京都地裁で争われていた四つの弾圧事件で一審判決が出た。

いずれも、関生支部を労働組合ではなく「反社会的集団」であるかのようにとらえ、ストライキや要求行動、コンプライアンス活動といった当たり前の労働組合活動を犯罪だとする極めて不当な判決だ。私たちは自らの取り組む産業別労働運動の正当性をより広く訴え、地裁・高裁での無罪獲得に全力を尽くす。

本日、私たちは、歴史的な一步を踏み出した。

長きにわたり関生支部を牽引してきた武建一氏が勇退し、湯川新委員長を中心とする新役員体制を確立した。私たちは、新たな時代に、新たな布陣で闘いに臨む。

私たちは、これまでの関生支部の闘いの歴史と伝統を引き継ぎ、どんな困難に直面しようとも最後まであきらめない姿勢を堅持する。そして、自ら考え、自ら決断し、自ら行動する。喜びも苦しみも仲間と分かち合い、ともに励まし合う。

組織と運動の飛躍に向け、組合員一丸となって闘うことをここに宣言する。

2021年10月10日

全日本建設運輸連帯労働組合関西地区生コン支部
第57回定期大会

訂正

本文2ページの5～6行にかけて、次の1行が脱落していました。お詫びして訂正します。

「意した。これは大幅な賃下げであり、これまで関生支部が労働者の生活向上のために闘いとして」